

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 国際化と日本人の枠組み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2025-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朴, 育美 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	<a href="https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000336">https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000336</a>

## 国際化と日本人の枠組み

外国語学部 教授 朴 育美

2024年1月、第56回ミス日本コンテストで、ウクライナ出身の椎野カロリーナさんが優勝したことが注目を集めた。椎野さんはウクライナ出身だが、両親の離婚後、母親と5歳の時に来日、母親が日本人男性と再婚しその後ずっと日本で暮らしてきた。2023年には日本国籍も取得している。そんな彼女の受賞がネット上で賛否両論の議論を巻き起こしたのだ。受賞に批判的な意見の多くは、外見的に日本人には見えない彼女は「日本人」として認められないというものだった。

カロリーナさんは、日本社会の中で「日本人として扱われずギャップに苦しんだ。それでも日本が大好きで、自分と同じような存在に光をあてるため」このコンテストに志望したと語った。受賞のスピーチでは「日本人として生きてはいますが、なかなか受け入れてもらえないことも多くあった中で、今回本当に日本人として認められたという気持ちで、感謝の気持ちでいっぱいです」と涙ぐんだ。

グローバル化の流れの中で、海外との行き来が盛んになった昨今、「日本人」というカテゴリー自体も流動化し、日本国籍を持っていても、祖父母や両親の誰かが海外にルーツを持っている人、日本国籍は持っているが、海外生活が長く日本語が第一言語ではなく日本文化にも馴染みがない人、外国にルーツがあるが日本国籍を取得することを選択した人など、日本社会の構成員は多様化している。

外見や言語、ルーツなどに応じた「日本人」の多様化については、「日本人」であることに何の疑いも持たずに生きてきた人々も、頭では理解しているだろう。しかし彼らが「日本人」の枠組みのいわばマージンのような場所を生きてきた人の疎外感を真に理解するのは難しい。カロリーナさんの言葉を聞いてはっとした人も少なからずいたのではないだろうか。

英語でマイノリティのことをmarginalized people と表現することがある。マージンとは、本体部分を取り囲む余白部分で、不必要にも見えるが、本体部分を引き立てるために重要な役割を果たしている。日本人のカテゴリーを成り立たせるためには、常に他者、「日本人ではないもの」が必要で、それはいわゆる「外国人」のような外部としての他者だけではなく、日本社会に包括された内なる他者によっても担われてきた。

「やっぱり日本人は～ですね。」「日本人なら誰でも感じる情緒ではないでしょうか」といった悪意のないコメントを責めるつもりはない。しかし長年日本で暮らし、日本国籍を持っていても「日本人」という言葉を聞くたびに、果たしてそこに自分が含まれるのかどうか、含んでもいいのか、と考えずにはいられない人がある。カロリーナさんがあえて「ミス日本」というコンテストに臨んだ動機もそのあたりにあるのだろう。彼女が求めたのは日本社会で「日本人」として承認されることだ。

日本社会でその一員として認められるのは、国籍が取れたから、長年住んでいるから、日本語が流暢だから、といったことでは保障されない。国籍、文化、血、そして外見を結びつける枠組みが、依然、「日本人」という概念を支えるバックボーンになっている。「私たち日本人」という言い回しになんの違和感もなく一体化できる多数派の人は、その枠組みには収まり切れない人の疎外感や経験に鈍感であることが許されてきた。しかし社会が多様化する今、自分たちが前提としてとらえてきた枠組みを相対化して考える必要があるのではないか。

これは昨今注目を集めるようになったレイシャル・プロファイリングの問題にも通じる。「日本人的でない外見」を理由に警察が特定の人を重点的に職務質問している慣習だ。『量的データから見る日本のレイシャル・プロファイリングの実態』は、見かけ上外国人だと認識された人ほど、(職務質問のやりとりで) 気分を悪くした経験は多く、警官の態度は悪いと感じ、在留カードを求められ、きっかけに関係ない長時間の聞き取りを受ける頻度、また過去にもレイシャル・プロファイリングを受けた回数も多いと指摘している。

根底にあるのは、社会に蔓延する外国人と犯罪を結びつける先入観だ。確かに外国人による犯罪のニュースは珍しくなく、外国人の犯罪が増加しているような印象を持つ人も多いかもしれない。しかし、法務省が作成している犯罪白書によると、外国人による刑法犯の検挙数は、平成17年に4万3,622件を記録したが、平成18年からは減少に転じ、平成29年の一時的な増加を経て、平成30年から再び減少し、令和元年は1万4,789件（前年比4.9%減）であった。つまりデータの上では外国人による犯罪が増加しているわけではない。

しばしば指摘されることだが、日本人が犯罪を犯した時は、国籍が注目されることはない一方で、外国人の時は「外国籍」の部分が強調される。そのため外国人と犯罪が結びつけられやすくなり、外国人を潜在的な犯罪者とする偏見が蔓延しやすくなるのだ。

警察の過度な職務質問に対して、2024年4月15日、東京や愛知県などに住む外国出身男性3人が人種や肌の色、国籍などを理由にした職務質問は「差別にあたり憲法違反である」として国などに賠償を求める訴えを起こした。3人の中には日本国籍を持ち、ずっと日本で暮らしてきた人もいる。「日本人っぽくない」外見ゆえに職務質問を受け続け、苦痛を感じてきたことは差別であり、憲法違反であるとする訴えだ。

これまで日本のマイノリティといえば、沖縄、アイヌ、在日など、言語や外見からはわかりにくい、いわばインビジブルな存在という特徴があった。この不可視性がマイノリティの問題に対する無関心を助長し、国籍、血、名前などによって形成される暗黙の日本人の枠組みを強化してきた。またマイノリティの不可視性は、彼らの多くが出自を隠し、葛藤を抱えながらも日本人として生きることを方向づけた。その結果、マイノリティの抱えるアイデンティティの問題は、社会の問題ではなく個人の問題として捉えられ、社会構造の面から広く議論されることはなかったように思う。

それに対して「外見」つまり目に見えるところに依拠するのが近年の「レイシャル・プロファイリング」という事象だ。日本のマイノリティは、

もはやインビジブルな存在だけではない。国際化の中で、多様なルーツを持ち「日本的な外見」を持たない人が増加している一方で、改めて「日本的な外見」が日本人の枠組みの重要な構成要素としてせり出してきたのだ。

カロリーナさんの感じた疎外感と、外見から犯罪者と見なされ執拗に職務質問を受ける若者のケースを全く同じ次元で語ることはできないかもしれない。しかし「日本人」の枠組みの境界にいる人たちの疎外感も、レイシャル・プロファイリングの問題も、根っこの部分では通じている。根底にあるのは、国籍、文化、血、名前、外見などの一貫性を軸とした日本社会の無意識の排除だ。

「多文化共生、開かれた社会を目指す」というような言葉は、視野を外へと向けがちである。外国への関心を深めることは重要だが、それは社会が抱える内なる他者への関心によって肉付けされたものでなくてはならない。他者との共生は、これまで確固に自分のアイデンティティを支えてきてくれた「日本人」の枠組みを再構築する、自分の価値観を揺さぶられるような経験であり、知識として学び、授業の中で教え込めるようなものでもない。また、語学運用能力の高さとはまた別の次元の話である。多様性を受け入れていくことは、これまで確固たるものとしてとらえてきた文化やアイデンティティの枠組みが、そもそも多様な要素を包摂しながら変化してきたものであり、またこれからも変化していくものとして、自分と他者を連続的な地平からとらえなおす、プロセスそのものなのだろう。

## 参考文献

“人種や肌の色など理由に繰り返し職務質問受けるのは差別” 外国出身の3人が国などを提訴 | NHK | 東京都

ウクライナにルーツ持つ女性が「ミス日本グランプリ」に、SNS上では批判的な意見も…「日本らしい美しさ」とは？【Nスタ解説】 | TBS NEWS DIG (youtube.com)

宮下 萌 編著『レイシャル・プロファイリング 警察による人種差別を問う』2023年。